



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 【定年退職教授の履歴および主要業績】 金澤忠博教授                                                           |
| Author(s)    |                                                                                     |
| Citation     | 大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 283-288                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/79080">https://hdl.handle.net/11094/79080</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【定年退職教授の履歴および主要業績】

金 澤 忠 博 教授



かな    ざわ    ただ    ひろ  
金   澤   忠   博   教授

1979年3月 信州大学人文学部文学科(心理学専攻) 卒業  
 1979年6月 信州大学人文学部文部教官助手(1980年3月迄)  
 1984年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程 修了  
 1989年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 単位取得退学  
 1989年7月 大阪大学人間科学部文部技官(教務職員)  
 1990年4月 大阪大学人間科学部文部教官助手  
 1998年11月 博士(人間科学) 大阪大学  
 2000年4月 梅花女子大学文学部助教授  
 2004年4月 梅花女子大学現代人間学部教授  
 2008年10月 大阪大学大学院人間科学研究科教授  
 2021年4月 大阪大学名誉教授

金澤教授は、1979年3月信州大学人文学部心理学専攻を卒業し、1989年3月大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を単位取得退学、大阪大学人間科学部文部教官助手を経て、2000年4月梅花女子大学文学部助教授へ着任、2004年4月には同教授に昇任された。そして、2008年10月大阪大学大学院人間科学研究科教授(行動生態学講座比較発達心理学研究分野)に着任した。大阪大学、人間科学研究科、人間科学部の発展に尽力し、2021年3月31日限り定年退職するものである。この間、大阪大学の研究と教育に従事し、多くの後進育成に携わった。

同人の主な研究領域は、出生体重1000g未満の超低出生体重(Extremely Low Birthweight; 以下、ELBW)児や自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorders; 以下、ASD)児を対象とした臨床発達心理学である。ELBW児を対象とした研究は、大阪府内の某病院で生まれた約500名のELBW児の長期予後を明らかにする共同プロジェクトとして、1990年より30年近くの長期にわたり同人が主導してきた。

一連の研究を通して、学齢期のELBW児には、ASDや学習障害(LD)や注意欠如多動症(ADHD)といった発達障害に似た症状が多く見られることが明らかになった。さらに、それら発達障害様症状の発症と、ELBW児の在胎期間、出生体重、周産期の合併症(脳室内出血や慢性肺疾患)、などの周産期因子との関連を検討した。その中で、一卵性と二卵性の双生児の比較から、ASDの症状の発現には遺伝的要因よりは共有環境の影響が大きいことが示唆され、ELBW児の発達障害様症状の発症メカニズムの解明につながる事が期待される。

また、同人は、ASD児への発達支援の在り方を検討するため、ASD児を対象とした早期

発達支援活動を開始し、ASD 児やその家族への支援方法を検討する研究プロジェクトを主導してきた。最も早期に開始した支援は、1 人の ASD 男児を 3 歳から 13 年以上に渡って長期間継続して行われた。児は、3 歳時点で、発話が無く、他者とのアイコンタクトが見られない重度の ASD 児であった。しかし、Picture Exchange Communication System (PECS) や認知課題等を用いた継続的な支援により、絵カードによる自発的コミュニケーションが可能になり、6 歳で書き始めた文字は 7 歳以降要求手段として用いられ、8 歳頃から音声言語による要求が自発し 12 歳以降急激に増加して主たる要求手段になった。それと共に ASD 児にはまれな他者とのアイコンタクトが増加した。視覚情報処理に優れる ASD 児の特性に注目し絵カードや文字を用いたコミュニケーションの獲得を経て音声言語の獲得につなげるこの支援の在り方は、ASD 児の家族に我が子の将来を期待させるものであり、参加希望の声が挙がる中、2012 年 4 月以降、ASD 児の早期支援活動とそれに関連する研究プロジェクトを本格的に始動し、PECS の訓練が ASD 児の共同注意等の社会コミュニケーション行動の発達を促進する可能性を示す等、臨床と研究の架け橋となる成果を発信してきた。

このような研究成果が得られたその原点は、大学院生時代に従事した自閉症の動物モデルとされる飼育ニホンザルの行動研究に始まる。同人の研究は、ニホンザル、学齢期の ELBW 児、ASD 児のいずれにおいても、研究対象の行動を直接観察し定量的に分析する手法を取り入れながら検討してきた。多様な発達を辿る対象を直接観察しながら理解しようとする一貫した研究姿勢は、ヒトの行動を理解しようとする人間科学研究科、比較発達心理学研究分野において模範となる立場を築いてきた。

大阪大学人間科学部内では、障害学生等修学支援委員会委員長、学業支援チームのチーム長、公認心理師プログラム運営室の運営等をつとめられた。学外においては、日本心理学会理事、同代議員、ハイリスク児フォローアップ研究会常任幹事、周産期精神保健研究会理事等を歴任し、多数の学会運営に寄与・貢献した。第 33 回ハイリスク児フォローアップ研究会では会頭をつとめ、自身の研究とも関連するハイリスク児の学齢期のフォローアップを見据え、会員のスキルアップを図るプログラムを企画した。同人は、臨床発達心理士認定運営機構の資格認定委員会委員長として、臨床発達心理士資格の普及にもつとめた。また、長年にわたって箕面山猿保護管理委員会の会長をつとめられ、天然記念物「箕面山のサル生息地」に生息するニホンザル集団の適正な保護管理に関する調査審議にも寄与した。さらに、人間科学研究科内で実施された ASD 児を対象とした早期発達支援活動は、約 10 年間で、約 40 名の ASD 児とその家族への支援を 1000 時間超実施されてきた。同教授の支援は ASD 児の発達・適応を促進し、彼らの父親・母親の子育てに向き合う姿勢を支えた。このように、研究者としてのみならず、臨床家としても多大なる社会貢献に携わった。

以上のように、同人は大阪大学および人間科学研究科・人間科学部における研究、教育、運営を通じて、その充実と発展に寄与するとともに発達心理学、臨床発達心理学等を含む学術研究と社会貢献の両立を通じて、学術振興に大きく貢献されている。

## 主 要 業 績

## 著書

1. 学齢期における超低出生体重児の行動評定．糸魚川直祐・南徹弘（編）『サルとヒトのエソロジー』培風館．1998 年
2. 障害児教育への心理テストの活用1 心理テストの種類．橘英弥（編）『障害児教育に生かす心理学』朱鷺書房．2001 年．
3. 超低出生体重児の学齢期総合検診．竹内 徹・糸魚川直祐・藤村正哲・金澤忠博・北島博之（編集）『大阪府立母子保健総合医療センター創立 25 周年記念論文集』メディカ出版．2007 年
4. 超低出生体重児の行動発達．南徹弘（編）『朝倉心理学講座 3 発達心理学』朝倉書店．2007 年
5. 社会・情動発達の基礎．近藤清美・尾崎康子（編）『講座・臨床発達心理学4 社会・情動発達とその支援』ミネルヴァ書房．2017 年
6. 乳幼児期における社会的コミュニケーションの学び．中澤渉・野村晴夫（編）『シリーズ人間科学 4：学ぶ・教える』大阪大学出版会．2020 年

他 5 冊

## 学術論文

1. Parenting and family support in Japan for 6-8-year old children weighing under 1000 grams at birth. *International Journal of Behavioral Development*, 19:477-490. 1996 年
2. Intelligence and learning disabilities in 6-to 8-year-old children weighing under 1000 grams at birth. *International Journal of Behavioral Development*, 20:179-188. 1997 年
3. カンガルーケアが極低出生体重児の母子関係と子どもの発達に及ぼす長期的効果．周産期医学, 36, 711-714. 2006 年
4. 超低出生体重児の精神発達予後と評価－軽度発達障害を中心に－．周産期医学, 37, 485-487. 2007 年
5. Long-term supplementation with  $\alpha$ -Tocopherol may improve mental development in extremely low birth weight infants. *Acta Paediatrica*. 104(2):e82- -e89. DOI:10.1111/apa.12854. 2015 年
6. Perinatal factors associated with long-term respiratory sequelae in extremely low birthweight infants. *Archives of Disease in Childhood: Fetal and Neonatal Edition*. 100(4): F314-F319. DOI:10.1136/archdischild-2014-306931. 2015 年
7. Influence of early social-communication behaviors on maladaptive behaviors in

children with autism spectrum disorders and intellectual disability. *Journal of Special Education Research*, 6, 1-9. 2017 年

8. Cognitive correlates of Japanese language (hiragana) reading abilities among school-aged very low birth weight children. *Journal of Educational and Developmental Psychology*, 7, 33-42. 2017 年
9. Eye movements and attention of very low birthweight children during single word reading. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*. DOI: 10.1007/s10882-020-09756-8. 2020 年